

アメリカ

駆けある記

谷川孝造

昨秋十一月にアメリカを訪問する機会を得た。これは文部省の教員海外派遣団二十名の一員としてであるため、ワシントンの政府教育機関にドーン氏を訪ねてアメリカ全般の教育事情を聞くほか、大学から幼稚園まで多くの学校を訪問する事が主目的であった。短期



アーモスト大学のキャンパス

間に一応アメリカ全土をまわるのであるから強行軍である。おまけに、定められたスケジュール以外に多くの人々に接し、なんでも見てたくさん経験のしようという貪欲な小生であるから、一日が三十時間あっても足りない程の多忙さであった。編集部から駆けある記

でよいとのお許しを得たので、通り過ぎただけのアメリカについての雑文を書かせていただいた。読み流していただければ幸いである。創立百周年記念式典に出席できない私は、ボストン訪問を機会に新島先生ゆかりの各地を訪ねる事を考えたが、学校訪問のスケジュールは現地へ着かぬと判らぬために全くの無手勝流である。寸暇を利用して百十数年前、青年新島が住んだボストン市街を歩き回るとモダンなビルとの間に古風なニューイングランドの面影を残す所も多い。一日、地図を頼りに急行バスでアーモスト大学に向かった。ピーターパンというかわい名前のバスである。市街を離れると氷河の侵蝕を受けたと思われる地形がどこまでも続く。約三時間で着いたアーモストは広大なキャンパスを持つ緑の学園都市である。同志社人に知られた新島先生の肖像はもとより、ジョンソンチャペルの所在をも知らない学生が多い。構内には漢字と共にローマ字で日本名を表示した大木もある。帰国後樋口教授にうかがうとウィリアム・クラークが日本から持ち帰ったものだという。美しい芝生と樹木に囲まれた丘の上にジョンソンチャペルはあった。その礼拝堂壁面

の二十九枚のうち、正面の肖像画が新島先生である。毎朝礼拝をもつチャペルと同じ肖像画を前にして感慨深かった。しかし、同志社の肖像画より小柄に、そして憂いを含んだ様子に面かれていると思ったのは一人旅のせいであつたのだろうか。異郷で記念式典をもつた思いで、乗り継ぎをしながらボストンの宿へ帰つたのは夜であつた。

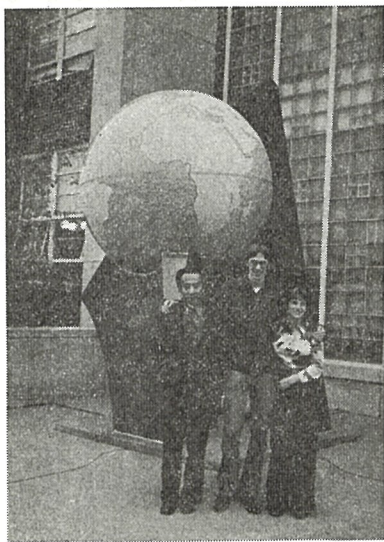
大平原のまつただ中のセントルイスは興味深いまちである。アメリカの交通の十字路に当たり、西部への入口でもあつたまち、ミシシッピーを挟んで英仏領の境界にあつたこの土地は多くの内容を持っている。ダウンタウンはニューヨークやサンフランシスコの様な高層建築は見られないが、ゆつくりしたベースで都市再開発が進んでいる。特に興味をひくのはユニオン停車場である。立派なステンドグラスがはまり、美しい壁画をもつ広大なコンコースも全く人影がない。四十番線もあつた線路も四本のほかはレールも撤去されて雑草が生い茂っている。たつた二人の切符売場の駅員が、昨日到着して明日出発するテキサス行の急行列車に乘れと勧める冗談にも力がなかった。正面玄関の強風に舞う紙屑や、

いくつもの無残な鳩の死体と、すぐ近くのハイウェイの賑わいとが余りにも対称的で、第二次大戦後の交通体系の激変を明確に物語っていた。東部の大都市間を結ぶエアーシャトルの、飛び乗って機内で切符を買う便利さと較べて、アメリカ交通事情の一端を知り得た貴重な見聞であつた。

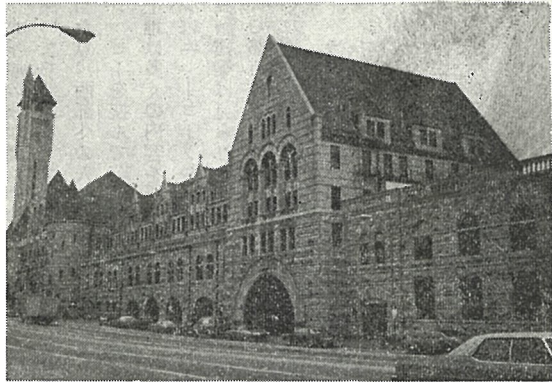
多くの人々とのふれあいの中で、何軒かの家庭訪問は非常に嬉しい事であつた。中でもボストン在住の校友であり、京都との姉妹都市委員でもある堀内氏にお世話になつたシュバイツァー氏の家庭、ロサンジェルス

のスパリング氏訪問などは印象に残る。パイロットのシュバイツァー氏の宅は、中学の卒業生で高校在学中の女生徒が留学している寄宿先である事から、その奇遇に話は夜遅くまでつきなかつた。感謝祭に招待されたスパリング氏の宅は、各種のパレードで知られたパサデナ通りに近い簡素な住宅と広い庭の家であつた。宿舎からフリーウェイを一時間、イタリヤに似た風景の中を突っ走

る。ロサンジェルスは広いまちである。フーバーダム完成のおかげで住宅や道端にもスプリングラーの水が豊かな緑をつくっている。全く人工の緑のまちなみである。元石油技師の夫君と大学講師の奥さん、それに老父と甥に私の五人の感謝祭である。ターキーに、箸や日本酒まで準備しての歓迎には恐縮するばかりであつた。夫君は庭木や草花が好きで、樹令四・五百年、周囲数メートルのカリフォルニアオークの三本の巨木が特に自慢である。話題は学校の事からスポーツ・料理・風習等



大西洋中心に置いた地球儀の前で



セントルイス、ユニオン停車場

々果てしもなく拡がっていく。サンフランシスコでファースト・コングレゲイショナルチャーチの日曜礼拝に出席して歓迎された話をする、山伏修験者の話まで出てくる。語学の乏しい私は辞書を片手に大童である。アメリカの話を聞きに来た立場が逆転し、異国にあって日本についての勉強不足を痛感させられた。せめて“Tell me about Japan”の一

冊でも持つてくるのだったと残念に思ったものである。感謝祭の数時間を過ごしたスパーリング家には、石油の国でありながら、赤々と木の燃える暖炉があり、それがこの家庭そのものの暖かさであった。新島先生の肖像画の下に「友愛の光のやどり海こえて」とあったのを想い出しながら、宿舎へと向かうのであった。

短期間の多忙の中で纏まった調査ができるとは予測しなかったが、学校や空港・機内とあらゆる所でアンケートをとってみた。方向感覚についての調査、すなわちイメージディスタンスとかメンタルディレクションとでも言うものである。量的にも統計上云々できるものではないし、紙面にも許さないのでその一端を紹介するにとどめる。質問は、「これから日本へ最短期間で行くためにはどの方向へ向かえばよいか」というもので、答えは与えた八方位から選ばせる方法である。極めて少数を除けば西部海岸と中部では西（北西と南西を含む）を示し、東部海岸では東と答える人が圧倒的であった。正解はいずれも北西である。東部は地理的に背後のアパラチア山脈で

中、西部と隔てられて大西洋に面し、歴史的にも、政治・経済等全ての面でヨーロッパにその顔を向けているせいであろうか。同中生を対象としたつぎの調査もある。学校から亀岡市までと、その約三倍も遠い大阪市との遠近を問うのである。生徒は一年の夏期キャンプで丹後田良へ行く時、通過地亀岡の所在を知っているが、大阪の方が近いと感じる生徒が相当数ある事と類似の事であろうか。諸先生方の教示を受けたいと思っているが興味深い問題である。

短期間とはいえ海外研修の機会を与えてもらった私は幸いであった。しかし文部省の教員海外派遣（幼小中高）に於て、私学は短期のみで長期研修からは除外されている。そして、同志社では幼中高教員の研修が十分制度化されていないのは残念である。研修の内容や方法はいろいろあるが、生徒に直結する明日の授業に役立つ事を思うと、一日も早く実現・改善される事を願って雑文を終わらせていただく事とする。

（中学校教諭・社会）